第 277 号　・・・めでぃかすとる・・・　平成27年5月15日発行

めでぃかすとる Médicastre

「　黄色いジュータン　」

鶴岡地区医師会　27年 5月号

鶴岡地区医師会勉強会抄録

日時：平成27年4月17日㈮ 19：00～20：30
場所：鶴岡地区医師会館　3 階講堂

『 どうなる、鶴岡のそして山形の医療！？ ケア需要予測とケアサイクル論から考える未来医療 』

一般社団法人 未来医療研究機構
代表理事　長谷川　敏彦 先生

これから50年で日本は全く異なった国になる。19世紀から1970年頃まで続いてきた、50歳以下人口がほぼ85%の世界、その若者の価値観を中心とする社会から、2060年頃、50歳以上が60%を占める21世紀社会に移行する。そこでは医療の意味、ケアの目的が大きく転換する。そして診療所や病院さらには介護施設の役割が大きく変容する。日本のもっとも豊かな文化を代表する地鶴岡ではどうなのか。2010年から2040年の鶴岡市の医療・介護・予防需要を量的に予測し、変わるべき医療の姿をケアサイクル論から質的に予想する。それによって病院や診療所の在り方、ケアの在り方、連携の在り方を考える。

石原莞爾などの日本の優れたリーダー、そして先進的地域医療情報ネットワークを産んだ鶴岡の地で、人類の新たな医療の在り方が産み出されることを期待したい。

第 0 部　課題提起

1）自己紹介
2）変わる医療の意義、病いの意味、がんで死ぬのがうらやまれる時代に
　19世紀型社会から、50年で21世紀社会に
　人口遷移の真っただ中
　未来社会からのバックキャスティングが必要
　「時間軸とロードマップ」必須

PART A　分析

第 1 部　社会

1　大転換する社会「人口遷移で日本は別の国に」
　50歳以下が80％の社会から50歳以上が60％の社会に遷移
2　大転換する人生「長寿革命で人生第二トラック」
　人生の重みが後半にシフト
3　大転換する家族「結婚革命でまちが家族に」
　多様な家族、空き家急増

第 2 部　列島

1　大転換する列島「末端から縮小」「もう一度まちづくり」
　1）高度成長期に、団塊の世代が田舎から都市に流入。郊外に住む
　2）日本の都市の構造、５つの地域
　3）末端から縮む
2　大転換する山形
　1）定住生活圏、地方拠点都市構想
　2）山形市、鶴岡市、川西町　2060年の世界

第 3 部　疾病

1　大転換する需要「介護・高齢者医療倍増」「入院・外来増えず」
2　労働力不足と介護医療需要増が同時併行
　2030年15％減、2060年50％減
　介護倍増、入院増加小、外来ほとんど増えず
3　需要予測
　滋賀プロジェクトを山形に応用
　出発点の高齢化、対象の年齢がカギ

第 4 部　医療

1　大転換する医療「治すから支えるケアサイクル」
　1）地域包括ケアにはケアサイクルが
　　ケアサイクル３つのレベル
　2）エピソードからケアサイクルへ
　　古典モデルの間違い
　3）単発外因疾患から複数継続疾患へ変わる
　　軸足が地域へ
　4）治す医療から支える医療へ
　　目的の転換
2　大転換する保険
　財源パンク

第 5 部　供給

1　大転換する病院
　病院の機能分化と連携
2　大きく変わる連携
　パラダイムシフト　「施設―疾病―ケア」
　歴史過程　「診療所―病院―地域」

第 6 部　総括

1　大転換する時代「共に老いるアジア」「日本の過去から学ぶ」
1）バッドニュース「産みの苦しみ」
　自然災害・政治動向
2）グッドニュース「豊かな歴史資源」
　日本は、過去７回、50年で大転換
2　大転換するまち「繋ぐまち　生きるまち　支えるまち」
　研究実験国家日本
　世代の役割分担
　大東亜共老圏　アジアの高齢化

第 7 部　付録

1　ケアサイクルの総合分析
　「ケアサイクルプログラム」、個人レベルで医療保険・介護保険の統合

資料

1　論文「変わる人生・社会・ケア‥研究実験国家日本の挑戦」
2　報告書「老いる都市と医療を再生する―まちなか集積医療の実現策の提示―」

第57回鶴岡准看護学院入学式

日時：平成27年4月9日㈭ 13：00～
場所：鶴岡地区医師会　3階講堂

平成27年4月9日、第57回入学式が挙行されました。呼名された25名の入学生に三原一郎学院長より入学が許可されました。准看護師になるという同じ目標を胸に不安と緊張の学生生活がスタートし、少しずつ笑い声が教室に響いている今日この頃です。学業とアルバイトの両立を目標とする学生が多く、会員の先生方の元で学べることに感謝するとともに温かいご指導とご協力をお願い致します。

阿曽　優妃

学校が始まって1週間、クラスの人とも話せるようになり、優しい方々ばかりでこれからの生活が本当に楽しみです。先日の看護概論で、その人らしく生きることができるよう日常を助けるのが看護師だと学びました。その為には多くの方と接することが大切だと感じました。世代や個人で違う色々な考えをたくさん吸収し、看護に必要な力を養いたいです。そして、一人一人がその人らしくいられるよう、相手を尊重する心を大切にし全員で笑って卒業できるように頑張ります。

生田　未来

新しい環境の中で、とても不安なことが多いですが、クラスの人達、優しい先輩方と心強い先生方のおかげで2年間頑張っていこうと日々思っています。勉強も先生の話を聞くのに精一杯になっていますが、家に帰ってから復習していくのが毎日の楽しみになりつつあります。また、クラスの人達との何気ない雑談やわからないことを共有するのも自分の知恵になっていると思います。これからの目標はまず、テストでは赤点を取らないこと、毎日復習することです。クラスの人達と協力し無事全員で卒業できるようにしたいです。

遠藤　愛子

受験の合格が分かった時は、「うれしい。」の一言でしたが、入学間近になると、果たしてきちんとやっていけるのだろうかという不安が入り混じり複雑な心境になった時もありました。しかし、この道を選ぶ決断をした気持ちに迷いはなく、自分にとって正しかったと思える様にこれから准看護師になる努力を続けていきたいと思っています。クラスメートの方ともかなり年齢差があり戸惑いもありますが、一緒に准看護師になる仲間として過ごし、喜びや悲しみも分かち合っていきたいです。

大川　このみ

目標だった准看護師。ようやくスタートラインに立った思いです。仕事と学業の両立、異なる年代の方々との学生生活など、入学前は不安の方が大きかったのですが、いざ始まってみると胸が高鳴り新鮮な気持ちで毎日を過ごしています。心配していたクラスメートとのやりとりも准看護師という同じ目標に向かっている仲間だと思うととても心強く、この年になってそんな仲間に出会えたことに心の底から喜びを感じています。授業内容も聞き慣れない言葉が多く戸惑っていますが、全ての講義が大変興味深く、准看護師として働く上で必要な知識を身につける為頑張っていきたいと思います。

旅行記『15の…夏』

満天クリニック　阿部　寛政

昭和49年（1974年）、夏休みが後半を迎えていた。ラジオからは、山本コータローとウイークエンドの「岬めぐり」が流れていた。高校生になったら、バックパッカーの仲間入りをしたい、ユースホステルなどに泊まってみたい、駅寝もしてみたい。まだ15歳のガキのくせに、高校生になった途端、少しいっちょ前になったと勘違いしていた頃のことである。

高２の夏休みは、仲間との冒険旅行を決めていたし、高３の夏は受験もあるし長期の旅行は無理だろう、一人旅に行けるのは、高１の夏、今しかない。それももうすぐ終わってしまう。南東北周遊券を衝動買いしてしまった。東京近郊から、南東北３県と新潟まで、国鉄と国鉄バス乗り放題の周遊券である。なぜ、南東北にしたのか。松尾芭蕉の奥の細道をたどってみたい、とは表向きの理由で、本当は当時あこがれていた桜田淳子が東北出身だった事とか、周遊券がリーズナブルであったのが決め手だったと思う。ユースホステルなどもいくつか予約を済ませ、親に談判した。「１週間ぐらい東北に一人旅に行きたいんだけど。もう周遊券も買ってしまったし。」 母親は「…、東北は人買いがいるっていうから、ひとり旅はねえ…」と渋った。安寿と厨子王の時代じゃあるまいし、人買いなんているか、なかば強引に説得し、出てきてしまった。８月末まであと10日をきっていた。

仙台、松島、金華山、まさに「岬めぐり」をし、YHに泊まった翌日、山形へ行こうと思った。もう午後遅い、仙石線の無人駅に寝ることにした。手樽（てたる）という駅名だった。５－６人掛けのベンチがひとつおかれているだけの駅舎であった。午後９時過ぎ、終電が行った後、ホームの上の無人駅舎には始発まで誰も来ないだろう、そう思ってサッシ戸に内側から鍵をかけ、小さなベンチの上の寝袋に入った。駅の中も外も真っ暗闇だった。うとうとしかけた頃、ドンドンドン、サッシ戸を叩く音がした。「鍵かけちゃだめだぞ！」男の声で怒鳴られた。『まさか…、人買いか』一瞬頭をよぎったが、鍵を開けざるを得なかった。「公共のものだし、中から鍵かけてはだめなんだ、なんだずいぶん若いなー、家出か？」中年の背の高い男だった。暗がりでも、かなり酒臭い息が匂った。「家出ではありません、高校生です。」「もう２学期は始まっているだろう、どこの高校だ？」男は、自分は高校の教師で、今日は寄合の後、少し酒を覚ますために駅舎に寄ったと言った。「高校は、鎌倉にあるＥ学園です。夏休みは８月31日まであり、２学期は始まっていません」と言ったところ、彼は高校名を知っていた。「ほー、遠いところから来たな、一人旅か、何年生だ？」高校教師と名乗る男が言った。「高校１年です。」「すばらしい。僕の長男は中学３年だけど、君のように一人旅に出る勇気や覇気がない。ぜひ、家まで来て、話を聞かせてくれ。」彼は、一緒に来てくれるよう僕を促した。うーん、ほんとか？　でも人買いには見えないしなあ、一緒に行くことにした。

真っ暗な田圃道を彼の少しあとをついて行った。手には、拾った石ころを握りしめていた。『もし人買いだったら、何とか振り切って逃げよう』そう思いながら、彼の後をついて行った。それほどの距離ではなかったのかもしれないが、暗闇と疑心暗鬼ですごい距離を歩いて

いる気がした。ポツンと一軒家の灯りが見えた。人買いの巣窟かもしれない。彼は、玄関で大声で言った。「ただいまー。客人を連れてきたぞー。」 奥さんと思われる優しげな人が「お帰りなさい、どうぞー。」と招き入れてくれた。石ころはポケットにしまった。彼は、本当に高校教師で、本当に中3の息子がいた。一家で歓待してもらった。風呂にも入れてくれ、あったかい布団に客間で寝かせてくれた。翌日は、朝食をいただき、弁当まで持たせてくれた。手樽の駅までの帰りの道のりは、昨夜と違い、あっという間の距離だった。

仙石線、仙山線で山寺へ。山寺で芭蕉の句碑にしみじみとした後、山形駅まで行った。弊衣破帽で高下駄の学生がいた。まだ、バンカラの、北杜夫の世界が残っていた。駅前でウロウロしていたら、駅前交番の警官に補導された。「何年しぇーだ？」山形弁で聞かれた。「高校1年です。」「いやいやいやー、高校なら2学期始まってっぞ。」「いえ、8月31日まで夏休みです。」「家さ電話してみろ。」家に電話したところ、ラッキーにも母親が出て、弁明をしてくれた。携帯のない時代であった。

其のあと、山形から米沢へ、小野川温泉まで行った。なぜ、小野川温泉か。東北紹介の小さなハンドブックに、小野小町ゆかりの地、共同浴場あり、と載っていた。スケベ心丸出しで決めたのだった。小野川温泉に着き、共同浴場を探したがよくわからなかった。それらしいところに入ったが、番台もない、金を払うところも無い。えーい、ままよ、と思い、脱衣場に服を脱ぎ、湯船につかっていた。後から、じい様がひとり湯船に入ってきた。「見ない顔だが、どこから来た？」「横浜です。」「親戚か何かか？」「いえ、ここら辺の方とは縁もゆかりもないです。」「だみだー。この湯は、近所で金を出して作ったもので、よそ者は入っていげねのだ。」だから金を払うところがなかったのか。「ごめんなさい、すぐに出ますんで」「ずいぶん若そうだけっども、何年生だ？」「高1です。」「今日はどこさ泊まる？」「米沢の駅ででも泊まろうかと思って。」高校の先生宅で、突然だがもてなしを受けたことが頭をよぎった。「どうもすいませんでした。」そそくさと浴場を後にした。すぐに、じい様が追いかけてきてくれた。「駅で寝るぐらいだったら、うちさ泊まっていがねが。婆様と二人暮らしで遠慮はいらねぞ。」「えー、そんな。ありがとうございます。」

突然に連れ帰った少年を歓待してくれた。生まれてはじめて『ダシ』を食べた。うまかった。ご飯を何杯もお替りした。ふかふかのふとんに寝せてもらい、翌朝、朝ご飯、昼用に大きな握り飯5つも持たせてくれた。

そのあと檜原湖や新潟にも行って、約1週間の一人旅を終えた。『ダシ』は、毎年夏になると食べたくなる好物となった。その2年数か月後に、山形大学に入学していた。15の時の一人旅が、山形大学に入るきっかけとなった事は、きっと間違いない。

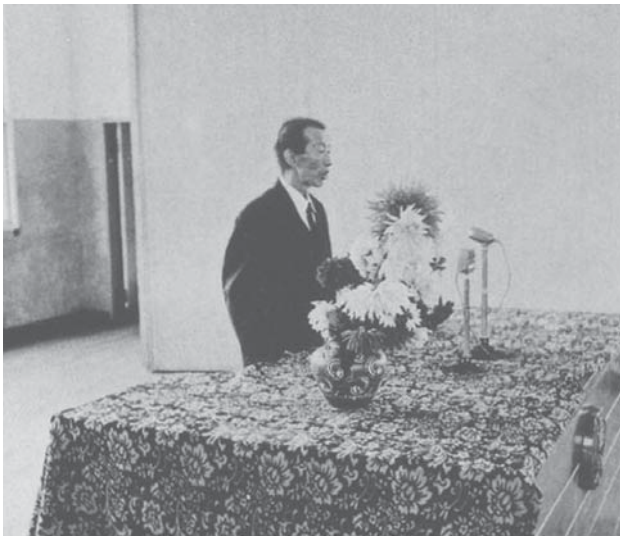
特別寄稿

地霊の生みし人々　－ 聖医　林 信雄（下）－

黒羽根整形外科　黒羽根　洋司

林信雄は67歳の生涯を閉じるわずか20日余り前、1964（昭和39）年10月20日に母校、鶴岡南高校で全在校生を前にして講演を行った。氏の業績を讃えようと始まった「林博士記念文庫」創設の式典が鶴岡で開催されたのを機に企画された記念講演であった。放射線被爆障害で両手指のほかに左前腕を失い、２年前には胃癌手術を受け、すでにかなり体力を消耗していたはずである。病める体を正装に包んだ痩身の林は、あたかも後輩への遺言状のごとき言葉を残していった。

青少年の育成のために、庄内にちなむ図書を市立図書館に贈るという今回の主旨を述べたあと、林は「何かをやろうと思って取っ組んだら、生涯やめないで取っ組んでください」と語った。その場に高校３年生として聴講した筆者も、いつの間にか林の没年に達してしまった。人を救うために生きた医師の後半生をたどることで、彼の遺志にこたえたい。



林信雄母校講演風景

― 放射線科黎明期の開拓者として ―

1919（大正８）年３月、千葉医専を卒業した林は、当時の習わしとして、同期生４名とともに柏戸内科に入局する。千葉医専が誇る名教授、柏戸留吉は温厚篤実で努力型の学者で、患者の診療には周到細心を心がけた。医者は他の職種にもまして、最初に指導を受ける上司に影響を受けることが多い。林も柏戸教授の姿勢を受け継ぎ、無給ながらも夜遅くまで仕事に打ち込み、勉学に励む充実した日々が続いた。そして、林がライフワークとする放射線医学との出会いがまっていた。

1921（大正10）年、林は内科レントゲン創設のため、内地留学の形式で京都大学中央レントゲン室にいくこととなった。教室の内容を充実させたいと考えた柏戸教授の異例の抜擢である。当時としては大変名誉なことであり、同僚の羨望の的となった。林医局員の優れた素質を認めての推薦であることは間違いない。

京大では先輩の浦野多門治講師の門下に入り、ひたすら専門とするレントゲン学の研究に没頭した。最初の頃は、技師と変わらぬ雑務にウンザリしていた林だが、医療の中で必要性を増してきている、若い学問の可能性に次第に魅かれていった。

一年半の京都留学で、最新の放射線医学の知識を身につけてきて千葉に戻った林は、医専の講師、愛知理学療法所の内科医として第一線の医療現場に復帰する。豊富な臨床例に基づいて研究に打ち込む少壮の医師は、内科的レントゲン診断学の開拓者として学会で注目されるようになる。だが、この分野での草創期にパイオニアとしての役割を担わされた林の身体は、次第に蝕まれていく。被爆障害という恐るべき伏兵があることも知らずに、ひたぶる心をもって日も夜も分かたず、新進の科学に立ち向かって行った結果である。

― 横須賀市立病院の医師として ―

34歳の春に学位を取得した林は、1933（昭和8）年、横須賀の市立病院に内科医長兼放射線医長として赴任する。この人事については、さまざまな憶測が流れたが、与えられた場で全力を尽くすのが林である。以後、この病院が足かけ30年にわたる彼の臨床、研究の場となる。たゆまぬ努力が続けられ、レントゲン診断学の先駆者、権威としての地位を着々と築いていく。しかし林の偉大さは医学者としてだけではなく、臨床医、社会人としての誠意と人間性にあったといえよう。

彼の人柄を伝える逸話を拾ってみよう。

■“林時間”について

会議などによく遅刻するので有名だった。時間に間に合うように早めに出掛けるのだが、バスの待合室で以前の患者から丁寧なあいさつをされる。それに対して林もまた丁寧に頭を下げる。問われるままにアフターケアについて助言し、相手が納得するまで説明する。バスは既に発車して、遅刻と相成るわけだ。

■“レントゲンバー”について

林の研究室の別名である。ポケットマネーがあると、よく酒を買い後輩に飲ませた。ここは常に若い研究者や看護師たちの息抜きの場であり、議論と笑い声の中で林はいつもニコニコと聞き役だったという。

そのほか「郵便屋さんよりも市内の地理にお詳しいのではないか」などという患者の声が林の日常生活を伝える。俗事にも手足を汚し、世間のことは隙間なくやった人であった。

― 放射線学の医聖 ―

林を知る横須賀の市民は、ほとんど異口同音に「林先生は、求める人ではなく与える人だ」と称したという。又、ある人は「もし横須賀で聖人をえらぶとしたら、林先生のごときは、第一に指を屈される人ではないか」と語ったという。

林の後輩の佐藤伊吉千葉大名誉教授は、次のように述べている。「林博士は、物質にも地位にも、また名声にも全く無欲な人であった。」

公衆の利益を先にして私事を顧みない聖人の行いを地でゆく林に、やがて悲劇が訪れる。50歳半ばころから手指に激痛が走り潰瘍が始まった。指を一本ずつ切り落とし、右示指だけが残され、64歳の時には左前腕1／3までを切断する。驚くべきは、この不自由な体で晩年は身障者福祉運動の先頭にたったという精神力である。

1964（昭和39）年11月12日、友人たちの奔走が功を奏して得た、生前叙勲の報を聞いた林信雄は静かに息をひきとる。焼香者の行列が延々と伸び、終えるのに2時間もかかったという。横須賀の地方紙は、軌を一にして林の功績を讃える記事で埋まった。

X線を発見したレントゲンは翌年、枢密院顧問官・ケリカー教授の手を撮影してその写真を一同に回覧した。初めて見る自分の手の骨に感動したケリカー教授は、X線を「レントゲン線」と呼ぶことを提案し、満場一致で可決された。さらに1901年の第1回のノーベル物理学賞はレントゲンに授与された。

しかし、きわめて無欲な人であったレントゲンは、自己の名を冠した「レントゲン線」を使わずX線の名で論文を書いた。彼の名誉のために創立された学会にも出席しなかったばかりか、貴族の称号であるフォンを与えられながら、それを使って署名することもなかった。名利に恬淡（てんたん）とした人は、X線を全人類のものとして特許も取らず、発生装置の詳細を公表した。

レントゲンを全世界に初めて公開したドイツ人と、それを臨床診断手技として高めた庄内の医人には、高潔の士という言葉がふさわしい。先人の崇高な生涯に思いをはせ、フィルムの陰には、誠実に生きた人々が放つ光芒が潜むことをいつまでも忘れてはならない。

Introduction

研修医

No.3

鶴岡での歩み

鶴岡市立荘内病院研修医　飯田　祥平

どうも初めまして。鶴岡市立荘内病院臨床研修医２年目の飯田祥平です。

鶴岡に来てから早一年、荘内病院での研修や私生活もだいぶ慣れてきた気がする最近です。

荘内病院で研修し始めた時は、右も左もわからない状態でしたが、まわりの方々の温かい支えにより、少しずつ病院に慣れていくことが出来ました。出身も出身大学も山形ではない私に丁寧に、親切に接してくれる病院関係者、そして鶴岡の人に感謝の気持ちでいっぱいです。

私生活の面で鶴岡に来るまで一番心配であったのが、雪です。雪国で生活したことのない私にとって雪は興味があると同時に恐怖でもありました。たしかに交通の面など不便なこともありましたが、近場で winter sports ができるなど利点もたくさんありました。まだ１年という短い期間ですが、雪国で生活したという事実は大変よい経験になると思います。

まだまだ何も知らない未熟者でありますが、人生は決断の連続であると私は思います。私は大学在学中に、鶴岡に行くという決断をしました。１年間過ぎてみてこの決断は間違ってなかったと思います。なぜなら、自分自身の成長を身をもって感じることができるからです。まだ初期研修期間が１年残っていますが、さらに心も体も成長していけるように、日々まわりの方々に感謝の気持ちを忘れずに精進していきたいと思います。

竹田 浩洋 先生 旭日双光章受章
まことにおめでとうございます

竹田浩洋先生は、平成27年春の叙勲において、長年にわたり地域の保健医療活動にご尽力された功績が認められ旭日双光章を受章されました。

まことにおめでとうございます。

退任の先生　長い間ありがとうございました。

松田　徹 先生

H24.4 ～ H27.3　理事　2 期　3 年

県医師会関係

H24.4 ～ H27.3　代議員　2 期　3 年

新入会員の紹介

氏　　名：北楯祥子（きただてしょうこ）

生年月日：昭和51年 6 月12日

生まれた所・育った所：山形県鶴岡市

勤務先・診療科目：池田内科医院

出 身 校：金沢医科大学

趣味・特技：今は子供と遊ぶのが趣味です。

鶴岡地区医師会会員の皆さんへ一言：鶴岡に戻って参りました。修行中の若輩者ですが宜しくお願い申し上げます。

庄内南部地域連携パス推進協議会の
ホームページを公開しました。

http://www.tsuruoka-path.net/

このホームページでは、当地域の連携パス推進協議会の活動、地域連携パスの内容・運用状況、パスデータの解析結果（集計表）、学会報告の要旨などを掲載しております。

トップページでは鶴岡の四季折々を紹介していきますのでぜひご覧ください。

表　紙

「 黄色いジュータン 」

佐藤　洋司

毎年今頃には温海温泉山手の一霞地域のいたる所に黄色い菜の花が咲き誇ります。これが温海かぶの花で、純正の種子が取れるのです。温海かぶは、江戸時代からの伝統野菜で、温海地域の山の急斜面で焼畑農法を用いて栽培されています。赤紫のかぶは、主に甘酢漬けに加工され、出荷されます。

いつも秋になると、一霞の患者さんの自家製温海かぶ漬けをいただいて味わうのですが、それぞれの家庭の味があり、一興です。

編　集　後　記

例年より、春の訪れが早かった今年は、桜の開花、山菜や筍の盛りなども、随分早い気がします。表紙の写真も、「見事な菜の花畑」と思って見ていたのですが、佐藤洋司先生の解説によれば、温海かぶの花だったのですね。何となく、大根のように紫の花を想像していたのですが、違っていました。調べてみると、アブラナ科アブラナ属は黄色の花、いわゆる菜の花で、カブはこちらに属し、大根のようにアブラナ科アブラナ属以外のものは白や紫の花が咲くようです。

竹田浩洋先生の叙勲のお知らせは、私たちにとっても嬉しい出来事です。荘内病院から湯田川温泉リハビリテーション病院と、鶴岡地区の医療のために長年ご尽力くださったことに、感謝申し上げるとともに、心からお祝いしたいと思います。先生は、現在も健康管理センターの健診医としてご協力いただいており、いつまでもお元気でご活躍されることを願ってやみません。

マイペット＆マイホビーや旅行記は、会員の皆様の普段は見ることができない一面を知ることができ、とても楽しい記事が多いのですが、今回の阿部寛政先生の、高校１年生の夏休みの東北旅行記は、ことさら感慨深く読ませていただきました。本当に、先生が鶴岡でお仕事をなさるきっかけになったのでは、と思わざるを得ないことと、その当時の人の優しさが、懐かしさとともに感じられ、何だか映画のワンシーンを見ているような気がしました。皆様はどのようにお感じでしょうか。

（福原　晶子）

編集委員：三浦 道治・福原 晶子・三科　武・斎藤 高志・中村 秀幸・伊藤 茂彦
発 行 所：一般社団法人鶴岡地区医師会　山形県鶴岡市馬場町１－34
TEL 0235－22－0136　FAX 0235－25－0772　E-mail ishikai@tsuruoka-med.jp
ホームページにも掲載しております 鶴岡地区医師会 検索 URL http://www.tsuruoka-med.jp